

日刊 發行所 東京 本社 同前番地（電話六三〇番）



刊夕日八月二十

定部金貳圓 廣告費... 印刷費... 郵送料... 電話六三〇番

景氣の根柢 (26) 經濟學博士太田正孝氏述 其の金の多い時即ち輸入超過がどの位あるかと申しま...

す是は能く素人の方が誤解をなさるのであります。在外正貨は外國に在る正しい金で、何か金でも外國にあるやうであります...

永野キヤンデー ストア 電話七五五番 又祝折詰物 大勉強致します

吉田眼科醫院 名特 入價 拭手 供提 徒弟 入用 福島縣平町五丁目 吉田屋 染工場

有聲座 帝キネ 帝キネ 帝キネ 帝キネ 帝キネ 帝キネ 帝キネ 帝キネ 帝キネ 帝キネ

外科 門 專 入院應需 上田外科醫院 平町南町 電話一二九番

一人長兵衛 八卷 氣骨稜々たる彼の一生こそ 實も花もあるものであつた

腕時計 振動腕時計 不感の腕時計 平町四丁目 會用時計店 電話三六三

磐城セメント 品質聲價共に拔群の!! 賣れ行きが事實を證明する

阿康藥店 代理店 平町古鍛冶町（電話四四番）

青森山 中風靈藥 動脈硬化症、腦溢血特效劑 定價一週分九〇、二週分一、七〇、三週分二、五〇

小名濱商港の完成後の利益

縣當局の提案理由書

本縣が國と共に大いに力を入れた第二期港灣たるしめんと今期縣會に提案した小名濱商港計畫に對する提案理由は次の如きものである

小名濱商港は横濱鹽釜の中間に位する良港にして曩に漁港修築工事を完成せし以來漁船の出入は勿論沿海航行の

汽船も亦本港に入港して風浪を避け或は貨物の吞吐するの便からず然も後方地域には所謂常磐炭田の無盡蔵の礦區を包有し背後は廣大なる山林地帯に連接し沃野連亘せる石城平野を擁するを以て本港を利便して貨物を移出するもの増加せり

今貨物 移動の状態を調査するに常磐炭礦の年中炭量は約三百萬噸を算し其重要消費地は東京横濱地方にして現に東京附近各驛に到着せる常磐炭は大正十二年統計に依れば無慮六十萬噸に達す其他林産、農産物海産物、肥料セメント、鐵、銅、鋼等小名濱港推定勢力圏内

各鐵道 驛に發着する總数は三百三十七萬八千噸餘に達するを以て本港に商港として設備を爲す時は大体七十萬噸の物質が小名濱港に轉屬し低廉なる石炭

明るい春を控へ 安い餅が搗ける

石城地方の歳晚

昨年とは諒闇とあつてお正月各家庭の食膳を賑はすべき筈の餅まで何れ控へ目に搗かれたので年の暮に於ける糯米の相場など高からうと安からうと餘り大した

影響も ないと言はれてゐたが愈々二旬餘にして迎ふべき正月は諒闇もあけ初めて明るみの昭和の春を待つ事として平町地方でも昨年控へられた餅も本年は何處の家庭にも澤山搗かれることとなる様に見られてゐるが昨今糯米の

相場は とうであらうかと調ると御多聞にもれず不景氣に惠まれてか程に比較して一升二錢高の三十四錢位であると言ふから安いのだ其原因は本年の糯米が一般に豊作の處へ來て

きたる殘額三百五十六萬圓に對し其の二分の一に相當する金百七十八萬圓は國庫より補助せらるゝ事に内定し且又淺野總一郎より金一百萬圓地元小名濱町より金五萬圓

修築費 寄附申出あるを以て縣は是等を財源とせば僅一百五萬圓の負擔にて本修築工事を完成する事を得るが故に六ヶ年繼續事業として昭和三年度より施行することに決せり

頭を悩ます

年賀状と平局

諒闇明けの年賀郵便は例年

長途騎乗を完成し

明日櫛田氏歸る

在郷軍人會や青年團が平商校庭にて歓迎

青森下の關間長途騎乗を無事完成した勇士櫛田彦之進氏は明日午後一時四十分平驛着にて到着すべき筈の爲め平町の在郷軍人分會青年團、乘馬俱樂部其他有志は驛頭に迎を爲し櫛田氏を先登に白銀町より大工町を経て五丁目に出で本町通りを平署前より右折して才地小路を通過商業學校々々の歓迎會場に入り先づ伏見町長、山崎在郷軍人分會長、三森青年團長其他有志より歓迎の辭を呈じ櫛田氏の經過報告あつて同氏の萬歳を三唱し更らに午後六時より住吉屋本店にて有志の

列車が衝突

三分間遅延

七日午前八時八分頃磐越東線小川驛江田間十三キロ三百メートル地先に於て枕木を積んだトロツコが積み荷をおろして居る際旅客列車第一

二號が進行し來たり衝突した此のために三分間遅延したがトロツコには乗者がなかつたので死傷はなかつた

ですが日本の粥のやうにやわらかく煮てはいけません成るべくこわく箸下千切つて食へる程度に煮ることが必要で牛乳を入れることゝ餘り宜しくありません唯それには一種の香がありま

すからそれを消す爲にレモンの汁を少し入れて入れると大層おいしく頂かれます

募集

交遊其他投稿を募集します



家庭園

小供のお辨當 贅澤に流れずにおいしいものを持たせてやりたいものです、硬い物は小供のお辨當には禁物ですから挽肉を玉子でまらめて砂糖と醬油

十一日聚樂館の長唄出し物解説

昨日の續き

◆紀文大盡

此の曲は從來の長唄とは餘程行き方を違えて居ります、昔の長唄は芝居に育つて來ただけに芝居や踊りと密接な關係をもつて居りますが、これは吉住小三郎、柗屋六四郎(後に稀音家、改名)が劇場と云ふ殻を脱して長唄界に革命を起した以後の作品であるから形式も内容も非常な相違であります、即ち純然たる歌謡曲であります、

明治四十四年長唄研精會第九十六回の演奏會で初めて封切つたもので歌詞は中内蝶二、節付は小三郎、六四郎兩師であります、こゝに注意せねばならぬのは從來作曲と云ふ仕事は三味線方の持前になつてゐた所が唄の小三郎が作曲したので唄と三味線の關係に一大變化を來しました、それが三味線方の六四郎の作曲と何んらの不調和の點もなく進

◆松の縁

吾妻八景を作つた六三郎が後に六翁と云つてから天保年間出來た曲でよく手ほどきに用ひてゐるが唄も三味線も實は非常に六ヶ敷もので、吉住

◆勸進帳

之れは餘りに有名なので説明を要しません、作曲は天保十一年六翁のものした曲で長い間中絶してゐたのを七代目海老藏の爲めに六翁が作り直したのであります、筋は云ふまでもなく諸曲の安宅から出て居りますが芝居を離れて唄ばかりを開いてゐると

殆んど意味を爲しません即ち芝居にはめ込んでセリフが入つて初めて筋が通るのであります、別に慶應三年に柗屋勝三郎が作つて安宅勸進帳と云ふ問答入りのがありまますこれはよく意味も筋も通つて居ります、三味線も寄せの合方や舞の合方が随分廣く弾かれて居ります、通して三味線の手が皮肉ではありませんがトーンテンと云ふやうな位の六ヶ敷個所が多いのでそれだけでもよく弾れば一人前の三味線弾だと云ふこと